

和文書  
5387  
2

横濱新報

おのづか

Asom

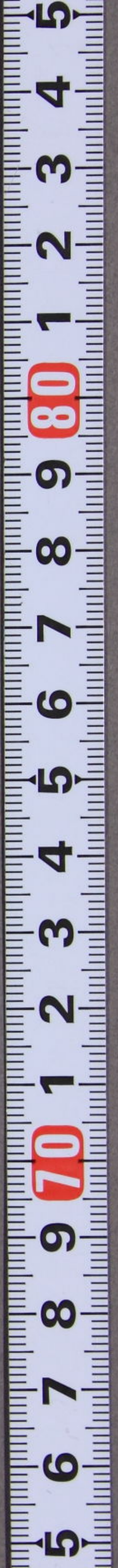
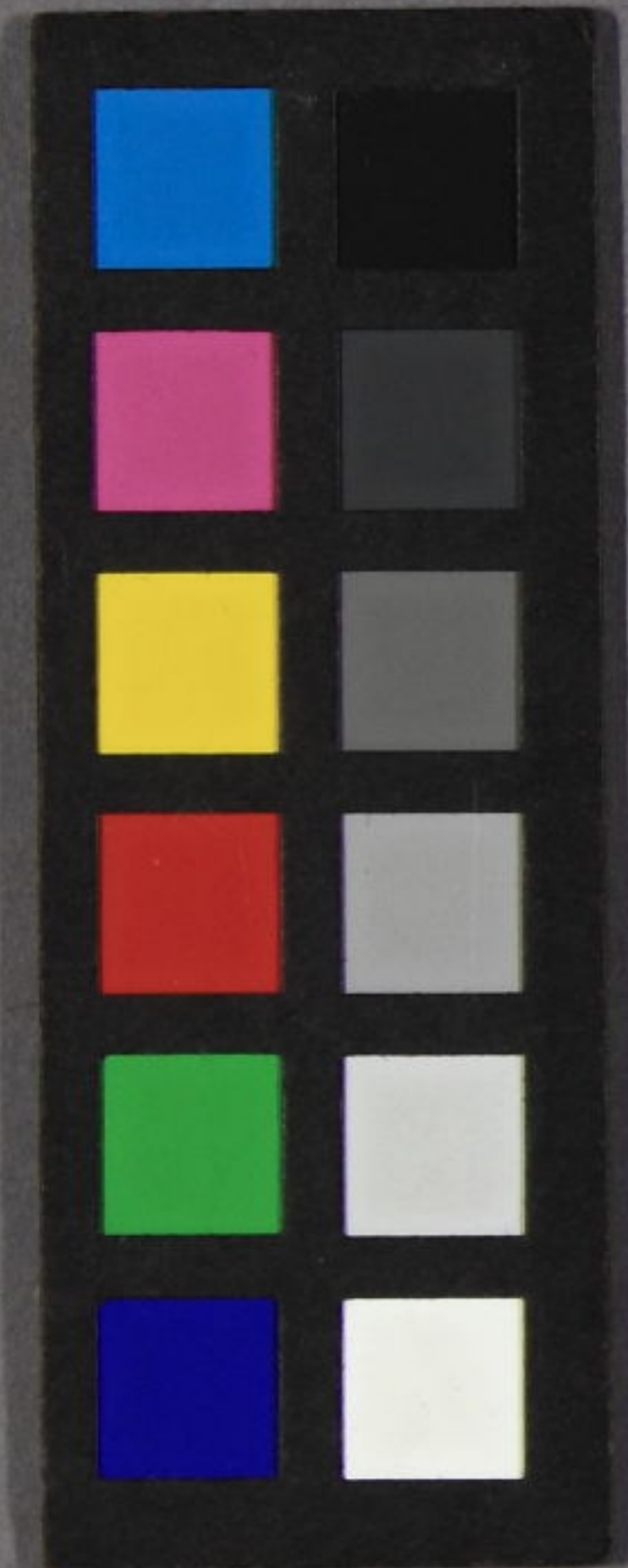
第五編

九十三番

ウエンリード

定價壹匁

K.S.ASOM



特 文庫10  
7387  
5

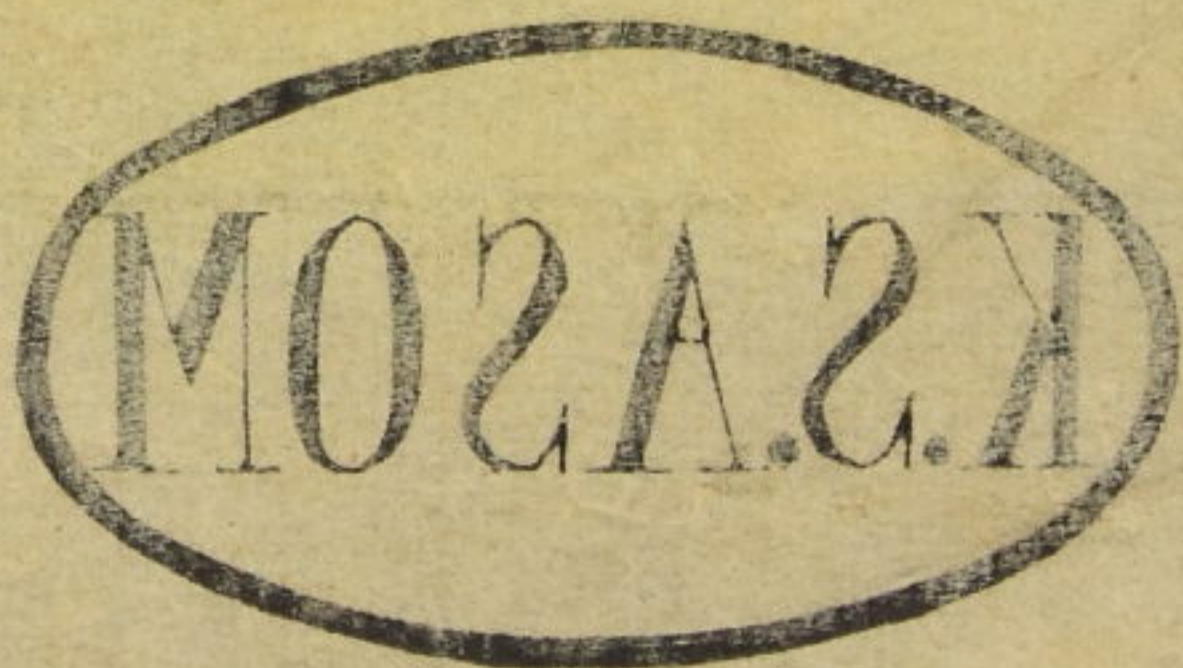
時條齋

かきつら

養正齋

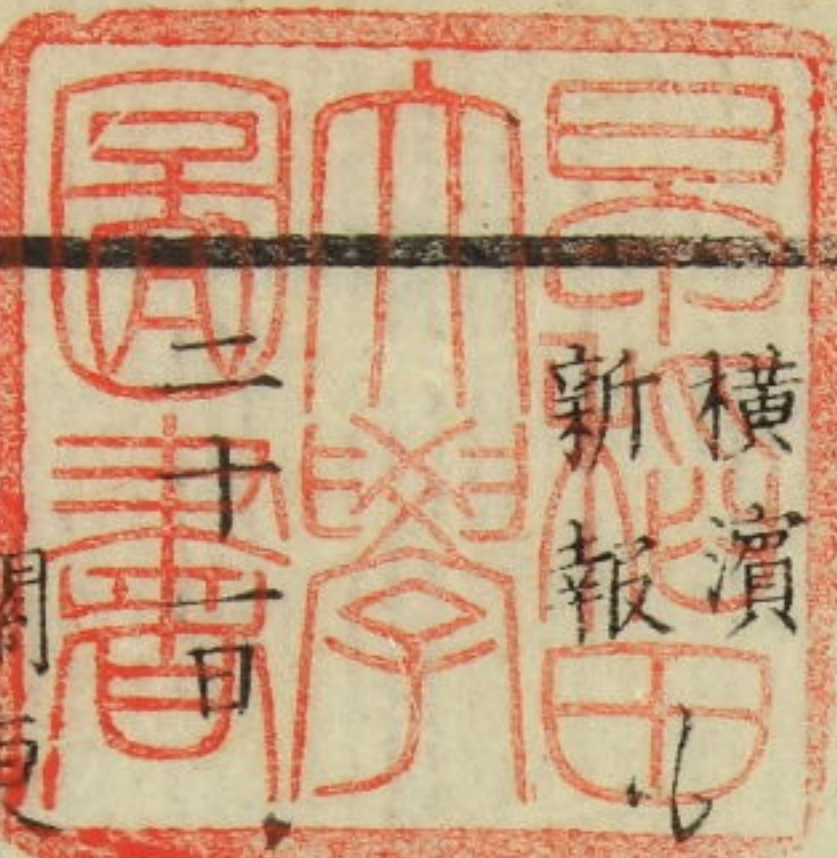
六十三番

ウエムリ



宝賈壹也

横濱  
新報



一月ごき第五篇

慶應四年戊辰閏四月廿四日

○滑耀先生日記のつぎ

關東勢三千餘人<sup>とぶぢ</sup>に主生城をとりかへ<sup>ぞ</sup>軍使を  
以て<sup>ふぢ</sup>譜代徳川家の屬<sup>ぞ</sup>にちか<sup>ぞ</sup>がら東照宮御旗へ  
敵對せし<sup>ぞ</sup>罪ゆる<sup>ぞ</sup>が<sup>ぞ</sup>速<sup>ぞ</sup>に降人と<sup>ぞ</sup>さ<sup>ぞ</sup>り<sup>ぞ</sup>  
城を<sup>ぞ</sup>あ<sup>ぞ</sup>ら<sup>ぞ</sup>さ<sup>ぞ</sup>る<sup>ぞ</sup>べきやと<sup>ぞ</sup>い<sup>ぞ</sup>せ<sup>ぞ</sup>け<sup>ぞ</sup>れ<sup>ぞ</sup>が<sup>ぞ</sup>城<sup>ぞ</sup>主<sup>ぞ</sup>は<sup>ぞ</sup>ほ  
官軍の屬<sup>ぞ</sup>せん<sup>ぞ</sup>あ<sup>ぞ</sup>ら<sup>ぞ</sup>さ<sup>ぞ</sup>る<sup>ぞ</sup>べ<sup>ぞ</sup>い<sup>ぞ</sup>の<sup>ぞ</sup>は<sup>ぞ</sup>も<sup>ぞ</sup>し<sup>ぞ</sup>て<sup>ぞ</sup>一<sup>ぞ</sup>方<sup>ぞ</sup>を<sup>ぞ</sup>さ<sup>ぞ</sup>り<sup>ぞ</sup>ぬ<sup>ぞ</sup>け  
て<sup>ぞ</sup>古<sup>ぞ</sup>河<sup>ぞ</sup>の<sup>ぞ</sup>方<sup>ぞ</sup>に<sup>ぞ</sup>お<sup>ぞ</sup>ち<sup>ぞ</sup>ゆ<sup>ぞ</sup>れ<sup>ぞ</sup>井<sup>ぞ</sup>伊<sup>ぞ</sup>藤<sup>ぞ</sup>堂<sup>ぞ</sup>の<sup>ぞ</sup>兵<sup>ぞ</sup>と<sup>ぞ</sup>一<sup>ぞ</sup>季<sup>ぞ</sup>に  
な<sup>ぞ</sup>ら<sup>ぞ</sup>ん<sup>ぞ</sup>とい<sup>ぞ</sup>ふ<sup>ぞ</sup>弟<sup>ぞ</sup>を<sup>ぞ</sup>た<sup>ぞ</sup>が<sup>ぞ</sup>ら<sup>ぞ</sup>の<sup>ぞ</sup>關<sup>ぞ</sup>東<sup>ぞ</sup>方<sup>ぞ</sup>の<sup>ぞ</sup>味<sup>ぞ</sup>方<sup>ぞ</sup>せん

月十五

こゝろ兄弟の何れをひに時うつりなるが攻争の  
十分に隊伍をこゝろ結一すちかまへたる折しも  
其日のハツ時ころより合戦をいふはり志きまに木  
砲を打つけりるほどに城の内外のちとみ火焰とあり  
けまばおそろしきこといせんこのたあ一城兵はたふ  
つんとするものもさうたうた煙もまだれておちゆく  
まのぞおぼかりあるかくて夜九ツ時をころりに  
城主二百人をころりの兵をひきあそく一方をさうぬぢ  
南をいしておちゆけあるが關東勢も追ひ  
せりける

二十二日

關東勢半牛城を乗取く點檢しあるに武器  
兵糧玉薬其外金銀等おほくまておぼてあげ  
せりける

二十三日

官軍關宿に屯したる由をきく關東勢押寄  
合戦ありたつては官軍利ありて中田の方へ  
引退きり

二十四日

勝に乗たる關東勢を是ハ未明より軍馬を整へ

中由宿へおしよせけるが官軍も嚴重げんじゅうに備へ  
て待まちつけあり九時まよりたとのひちたまりなれ  
どもいまも勝負あひまひつるえさりある處小太村肥後守  
めらむきりめく官軍おほひに敗走そくさるる

二十五日

官軍ハヤをり中甲驛小陣取ちんぢたり關東勢もけふハ  
たふありとあふくそ日をうらりる

○今日信州飯山へ會津勢五百人計おしよせて  
尾州の兵と合戦ありとの米澤庄内よりあひて  
加勢の兵とせたりとの色巴會津方勝利の由

○今日平尾めく官軍小生捕とらわれる近藤勇  
を死刑しつじに行ひ其首くびを京師きやうしへ送る

二十六日

官軍ハヤをり中田に陣取居ちんぢりきふけふと  
あつよりあつまり關東勢へくそりりる人数にんすう  
の南部なんぶ上杉水戸會津の兵をうび小生木村  
降参くだまの人等都合二千七百人とせきとえり

二十七日

關東勢評議ひやうぎしるいのりまきにうらりてお  
たりと際限さいげんあり海うみけふの風雨をさるる



重二郎はド老九人の者ありはく討死す後陣  
にそまへし因州勢たつをいんて一戦にもおまへ  
敗走志ありりりいざやいさひ是まどなるぞとて  
申の刺はるりに士卒まどあく引退きあつこの關  
東勢にせも手負五十餘人討死八人生捕分取  
おびそくくつりあるやと

廿八日より急なる次篇にあつて一日  
出板いづはる

浪華よりの末信に云聞四月七日ふみど京都一  
還幸ましくけるされども市中いさむしくも  
なればた内舞商人まことにあまひいはしく  
ましと大筒洋鎗火薬などいよくまをり  
事はく日本人もた進ぶつりあひしをもつま  
ちば横濱のやうにめんたうなることあり御一新の  
どりのつちあはせばよとまはもあつる陋習ハるおま  
廢せらるべしそく外商等まこれせのぞあり  
○十七日に法國の新ニストルよとまはふまきま  
法國の帝このむとを撰み日本につのりた

申るんハ現今日本ハ南北の亂あり然し日本  
最ありんむべき産物ハおろく北部の領地より  
出るにより此人と日本につらりしつらりし小北部  
の諸侯に約し生糸と蠶種紙をおろく買  
しめんつらめなり

○十八日キウシユウといふ火輪船にて五六百人の官兵  
と江戸におろり

○とろりとつみ帆船一艘支那の香港に錨泊しつり  
日本の旗をたぐれば日本船なるべしと  
船將ハ西洋人なり

○十二日出の十海の書信きよのふと記ありらるに

日本雜貨の行情單あり、香蕈百斤キレ三平兩  
より三十二兩まゝ、海參上物四十四兩、次品三十二兩ありが鮑魚  
廿五兩より三十二兩まゝ、魷魚十兩より十六兩迄魚翅  
白三十兩、黒十六兩むら蝦米十二兩より十七兩まゝ、  
樟腦十四兩より二十兩、茯苓三兩より四兩、五倍子二兩  
より三兩、蘇木三兩むらぐらゐ、牡丹皮十八兩、香帶壹兩より  
三兩まゝ、帶絲上物四兩、次物二兩むらぐらゐ、との壹兩と云ハ、  
洋銀壹枚二分五厘ほどはとほく、大抵日本乃金壹兩と  
同程あり、

○このまのゆきさる 醫館いけんはく 癘瘵れんざいで死しどひやを  
あまけまより 肺はいの臟ざうふ三ツめぢ死しを結むすけり一ツハ  
づりくの中なかはくまごすり一わく一ツハみみふ  
ちりくぬる一ツハまごにらまごく何なにかに  
ありたる

○關宿の城主久世侯の藩士南北兩列くわんしやくふりるるが北部  
小屬せりやくせる者四五十人深川伊勢崎町屋敷ふ在あるるに  
南方みなみ屬ぞうせる藩士官軍はんしと共ともふ去い廿三日赤明深川邸あかあけ來きり  
談判だんぱん及およびゆ處終つひ小戦せうせん争まがり相成あひあり双方ふたう負まり有ある之由



内  
外  
中  
五

六

西垣文庫 <sup>特</sup>  
文庫 10  
7387  
5